

# 映画監督

# 高橋伴明

「この作品が遺作になるかもしれない。」

2年前、新作映画を撮る前、(一)覚悟したという。

監督としての名を日本映画界に知らしめた出世作「TATTOO」(刺青)あり。では、凶悪な銀行強盗立てこもり犯人を、「BOX」(箱)事件)命とは一では罪を裁くことに葛藤する裁判官を。また、「火火」では陶芸の世界で自立の道を切り開く女性陶芸家と、作品ごとに異なるまなジャンル的人物像を描き続けた。

監督デビューから、半世紀近くの邦画界の重鎮が発した「遺作」という言葉に周囲は驚かないはずがない。だが、本人は「だってこんな感じだ。」

「近年、新作にかかる際にはいつも、そんな覚悟で臨んできましたから。」そう語って静かに笑ってみせた。

奈良で育ち、地元の進学校、東大寺学園高校から早稲田大学へ進学。映画研究会に入るも、学生運動で大学は封鎖。「講義もないので自然に中退してしまっ」と振り返る。その後、若松孝二監督率いる若松フロに入り、頭角を現す。

重厚な社会派作品を得意とし、実在の事件や人物をテーマに、人間の正義感や倫理観などを見る者に真正面から突き付けてきた。

新作が問うのは死生観だ。主人公は在宅の末期医療に挑む医師。

「65歳を超えた頃から、自分の死に方について考え始め、以来、死はずっと映画で描きたいと構想していたテーマなんです」と打ち明ける。

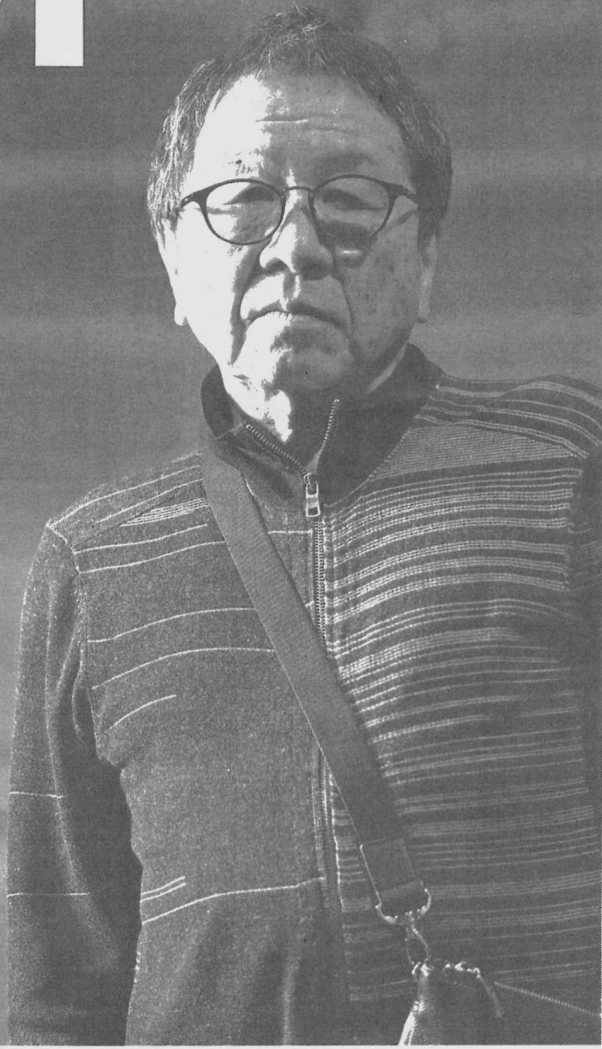
高橋伴明(たかはし ばんめい) 1949年5月10日生まれ。71歳。奈良県出身。早稲田大学第二文学部中退。75年から若松プロダクションなどで活動し、82年、「TATTOO」(刺青)あり。で数々の映画を受賞。新作は「道(白磁の人)」「2012年」など。「赤い玉」(15年)がモントリオール世界映画祭に出品。新作「痛くない死に方」は20日から全国で順次公開。

# いつも、遺作

若い医師、河田(柄本佑)は在宅医の先輩、長野(奥田瑛二)と出会い、自宅で死を迎える患者と向き合う覚悟を固める。末期がん患者の本多(宇崎重)は底抜けに明るく、河田は戸惑うが、

「集大成と呼べる船役」に遺作の覚悟をきかかれますか?と聞いてみる。苦笑しながらうなずいた。「脚本は全て書き(最初から俳優を決めて書く)です」とも。

# 新作は



「痛くない死に方」20日から全国で順次公開

## 妻・高橋恵子の「ゲキ」で吹っ切れた「自由な映画撮影」

出演依頼に、奥田は「脚本を読まずに引き受けたが、後から柄本は奥田の娘、安藤サクラの夫」が主役で驚いた」と語った。

現場で、親子共演の指揮を執ったが、「一切慣れ合いがなかった。プロの演技のぶつかり合いを撮れませんでした」と大にえた。

今から16年前、田中裕子が陶芸家を演じた「火火」で取材したとき、「もう監督をやめようと思ったんですよ」と聞かされた驚いたことがある。「では、なぜ再び振り始めたのか」と問うと、「妻から「私は映画監督と結婚したんです」と思っただけです」

妻から「私は映画監督と結婚したんだ」の後、続けて、「もう言われたら、いいじゃない」と。

「妻の言葉に吹っ切れた」ぞだ。白紙に戻って振り始めれば、いと。それ以後、余計な力が抜け、自由を感じながら撮っています。

数年前まで約10年、京都造形芸術大学で映画を志す学生を指導した。「今回の撮影では教え子が助監督に付いてくれた。現場で育てるためにも撮り続けたい」とね。

では、今作は本当の遺作ではないのですか?

「撮りたいテーマがまだまだある。今も新作の脚本を書いています」

71歳。遺作という言葉を記者を翻弄し、それを楽んでいるかのようだが、眼光の鋭さはいささかも鈍らず、爛々と燃えていた。

あす(17日)は、俳優の藤山陽治郎さんです。